

北海道と東北地方の 地名関連について

<tápkop> <tóko-'omaí> <'Ane>
及び <táy> について

藤 島 範 孝

1

東北地方の地名に Aínu 語の地名が残っていることは今日周知の事実となっている。が、一方に於いて東北地方に残在すると考えられるあまり難解な地名を Aínu 語で分析し解釈して誤に気付かずにいる場合も少なくないように思っている。ただ単に北海道に残在する Aínu 語地名に類似しているからでは危険きわまりないものであると筆者は既に是の点を指適しておいたのである⁽¹⁾。

亦、先に東北地方の言語は、和語の原型に北侵して来た西南和語が重なり、その上残存していた Aínu 語と混濁して東国方言が構成されたものと仮定したのである⁽²⁾。従って、東国方言の内容は、Aínu 語も含むし、同時に西南和語も含むと考えたのである。ある時は西南和語が未消化のまま東国方言の中へ挟み込まれ、Aínu 語の一部となって北上したものもあると推定している。つまり、東北地方の東国方言（当時意識的方言形態をもって固定していなかったと思われるが、）が篩作用を資らし、西南和語の一部を北へ送り込み Aínu 語の一部を構成したのである。

よく、Aínu 居住が生棲して居なかったと思われる西南日本に於い

北海道と東北地方の地名関連について（藤島）

て、Ainu 語地名があると言われるのは、西南和語の一部と Ainu 語の一部は西南和語に源流を持つからである。既に指適して来た <pira> や (3)(4)(5)(6)(7)(8)(9)(10) <shrar> 等は Ainu 語ではあるが、西南日本に源流を持つため、しばしば民族の南下と混同されてきたのである。言換えれば東北地方以南の Ainu 語的な地名は、もともと西南和語なのである。Ainu 語地名といわれる地名の中には西南和語で解釈できるものもあるという事になる。

東北地名の内西南和語の一部が Ainu 語化したのは弥生前後であるとみる。これらの地名が所謂日本語化したのは奈良朝以降であるとみる。東国地方に於いて斑状文化状の形態をもっていたと推定される Ainu 語文化は勿論今日の Ainu 語文化とは異なったもので有ったかも知れぬし Ainu 語それ自体発音或は語形について異なっていたとも考えられるし西南和語を摂取した際にも当然音韻の変化はあったと考えられる。亦、これら言語が地名として定着する時には更に転訛があり、地名として伝えられるうちに変訛があったとして咎る事は出来ない。しかし、地名が今日定着しているからといって、ただちに Ainu 語系民族が定着していたことにはならないと思われるので注意を要する。北海道へ進出して来た和人が、しばしば Ainu 語を用いて地名とする例も少くないので、一地方の地名は充分史的な集落変遷史と併せて考慮する必要がありそうである。

地理的にみて、東北地方に段渚する Ainu 語とおぼしき地名と北海道南部の地名がより類似すると思われ、所謂北方系 Ainu 語には直接の関連がないものとみる。例えば <pira> は東北地方に残存しても <pesk> がないという事実から推して想定することができる。従って、北海道南部の Ainu 語方言を中心に解釈して分析してよいであろうと思われる。

以上の様な手法をもって、東北地方の Ainu 語とおぼしき地名を分析してみようとする。既に金田一京助は <北奥地名考> の中でいくつか

指適しているし、山田秀三も＜東北と北海道のアイヌ語地名考＞のなかで、地形的な類似からいくつか指適している。これらの地名を整理し乍ら解釈を加え、殊に西南和語との関連を追求してみたいものと考えている。

2

①佐比内（さっぴない）⁽¹¹⁾遠野・紫波・二戸，＜sát-pí-náy＞，＜sát＞は乾く，＜pí＞は小石，＜náy＞は沢である。乾く石川となる。涸れ川を指すことが多い。この他釜石市の佐比内，八戸市小中野町の佐比代，上佐比代がある。若し佐比代の（代）が＜táy＞とすると＜sát-pí-táy＞で，乾いた石森になるが，類のない地名なので＜náy＞の変訛とみてよいであろう。弘前市に小比内（さんびない）があるが＜sán-pí-náy＞ではなく，＜sát-pí-náy＞の変訛とみる。もっとも，＜Sán-pí-náy＞で石ころの沢へ降る処とすると地名として有りそうだが類似が少ないので採らない。亦，秋田市新屋町には，比内沢，比内南町，大館市には比内前田北秋田郡には比内町がある。各れも＜pí-náy＞と地形からみて推定される。ただ，北秋田郡阿仁町の比立内（みたちない）や同田代町の比立内は別なものであろう。阿仁の比内沢は＜pí-náy＞であり，猿飛来（さっぴらい）も＜sát-pí-náy＞和語化と考えるとよいであろう。北海道はで樺戸郡の札比内＜sát-pí-náy＞松前郡の札前＜sát-náy＞，函館市の函館山の山麓にある＜sát-náy＞，沙流郡の＜pí-náy＞，三石郡の＜sát-náy＞がある。樺太⁽¹²⁾には＜sát-pí-náy＞や＜pí-náy＞が少く，かつての泊居町に＜pí-pí-pét-i＞があり，広地に＜pí-'ot-p＞があった。西南地方では檜内，火内，肥内と表現したものが多く，三重県藤原町の日内もこれに当るものと考えられる。なお，猿飛来は宮城県栗原郡津久毛にある地名である。

②似内（にたない）花巻，似鳥（にたとり）二戸は各＜nítat-náy＞と

北海道と東北地方の地名関連について（藤島）

<nítat-'or>で、湿地の川⁽¹³⁾、湿地のある処⁽¹⁴⁾と解されて来た。亦、仙台の名取（なとり）も古くは丹取（にとり）とあるので<nítat-'or>の変訛であろうといわれている。別に西南地方では、仁田，奴田，怒田とも表現され湿地を現わしている。<ni, no, mu>は音韻変化であるとする野田，牟田，大牟田等も同源同義となる。新田（しんでん）でなく，新田（につた）と読むと<nítat>と同義語になって来ると考えられる。東北地方の各地に<nítat>を拾ってみると，八戸市の新井田（にいた）青森市新田（にいた），秋田市仁井田（にいだ），能代市仁井田白山（にいたしろやま），大館市二井田（にいだ），北秋田郡合川町新田目（につため），平鹿郡十文字町仁井田（にいだ），湯沢市大字仁井田（にいた），青森県南津軽郡尾上町新田（につた），久慈市新井田（にいだ）等が当筈。

仁井田，二井田，新井田，新田，新飯田などの表現の差は有るが同義語である。能代市の機織仁井田は米代川の沖積段丘上にあって湿地である⁽¹⁵⁾。秋田市仁井田は雄物川の氾濫原の旧河道河跡湖一体を指して各れも湿地と考えてよい地形である。猶合川町新田目の目については詳らかでないが，新田が<nítat>とすると目は<mém>と考えられる。<mém>は<yanmakka>や<tó>と同義語である。

北海道では一般に「坏坭川」と訳され，勇払郡鵠川に<nítat-náy>，同厚真に<nítat-náy>，勇払川筋に<nítat-póro>，弟子屈に仁多，仁田があるが，これは<nítat-'or-'om-pu>が原名である。浜頓別の仁達内（にたちない）は<nítat-náy>が原名で達（たつ）が後に達（たち）と呼称されたものである。沙流にも<nítat-náy>がある。仁立内（にたちない）等の漢字仮借で同じく，たつがたちと変訛している。浦河には<nítat-pa-'oma-náy>で坏坭の東にある川と訳している。十勝の浦幌には<nítat-kóm-ush-pé>がある。利別川には<nítat-'oro-'oma-p>，阿寒川には<nítat-pét>，摩周湖には<nítat-'oro-'oma>，忠類川筋に

北海道と東北地方の地名関連について（藤島）

<nitát-'oro-'oma-p>, 宗谷猿払に <nítat-náy>, 能取に <nítat-'ou-cóchy>等各れも湿地帯の地名となっている。樺太の真岡郡には<nítat-ush-i>という地名もあった。

①長流部（おさるべ）二戸，小猿部川（おけるべがわ）秋田等の地名は <'o-sár> から変訛したものとされている。<'o> は川尻を指し <'o-sár-'un-náy> だとか， <'o-sát-náy>, <'o-síra-ne-p>, <'o-sámam-p>, <'o-sámam-ni>, <'o-ruyka>, <'o-pírakasi>, <'o-sírar-náy>, <'o-tés-pét>, などとして用いられている。これに当籤る東北地方の地名を索いてみると，幾つか疑わしいものがある。ただ，猿のつく地名は字義通り動物の猿を意味する場合もあるので慎重でなければならぬ。例えば，西津軽郡茶臼山の猿の湯は，猿が発見した温泉という意味であるし，山梨県大月市の桂川にある猿橋は，猿が手足を繋いだ事に暗示を得て橋を造ったといわれる。亦，徳島県美馬郡の猿飼や奈良県吉野郡十津川の猿飼は字義通り猿を飼う部落，猿を飼う人たちの意味があるとされている。青森県下北郡東通村に猿ヶ森，南津軽郡尾上町に猿賀がある。猿ヶ森の周辺は白糠・尻労・尻屋等 Ainu 語とおぼしき地名が多いが今の処 <sár> とは決め難い。猿賀の方は <sár-ka> で葦原の上と考えてよいであろう。秋田県の鹿角郡の旧名も猿賀で同様に訳してもよいものとする。津軽の方言で猿毛質（さるけしつ）の土地という泥炭地を指するので <sár> から来ているとみてよい。秋田市の猿田川反の猿田は <sár> と考えてよいようである。猿田川の氾濫原である湿地帯に命名されたものであることは今日の地形からいってほぼ明白である。この場合 <sár-ta> の <ta> が何かといえば強めの助詞と考えてよい。<tá> は摘む，汲む，<-ta>…に，で，それ，そこ等の意であるが，ここでは助詞とした方がよい。亦 <taa> たたく，あの等の訳も考えるが適切でない。大館市には猿聞がある <sár-'oma-náy> である。鹿角郡には尾去沢町があり尾去沢鉦山の地名がある <'o-sari> である。

北海道と東北地方の地名関連について（藤島）

<sár>は<sára>, <sári>, <sáru>等の語尾変化をする。平鹿郡の大森町の猿田は<sár-ta>, 平鹿町の猿半内は<sár-pa-náy>である。<pa>は上手であるから、葦原の上手を流れる川の意味である。宮古の佐羽根も三戸の佐羽内も山形の猿羽根（避翼）も全く同様である。東北地方では内<náy>を内<ni>或は<ne>と発音することが多く、（根）を用うることも決して奇異でない。秋田県山本郡鹿渡にも猿田がある、これも<sár-ta>, 由利郡鳥海村にある猿倉は<sár-kurasno>ではないかと思われる<kurasno>は<kúnne>の方言である。盛岡市繫の上猿田、猿田、下猿田の猿は<sár>である。北上市の相去町の去も<sari>と考えられる。相は<háí>で蕁麻の変訛であろう。一関市の相去も<háí-sari>である。北上市の相去も同様と思われる。下閉伊郡の岩泉町の猿沢は<sár-saha>であろう。<saha>は山間の平地を意味する。しかし、同町の浅内にある猿定及山田町の猿神、田野畑村の猿山及和賀郡沢内村の猿橋については地形との比較でも現在のところ断定する段階には至っていない。東磐井郡大東町の猿沢は<sár-saha>であり、二戸郡の福岡町足沢（たるさわ）或は<sár-saha>の変訛とみれないことはない。

この他長内（おさない）、生内（おさない）、小山内（おさない）、生内（おぼない）、生保内（おぼない）等が青森、秋田、岩手に涉って散在している。これは<'o-sár-náy>か<'o-sar-náy>であろう。長流（おさる）、長臼（おさうす）も<'o-sár>, <'o-sár-ush>である。青森県上北郡六ヶ所村の尾駮（おぶち）は<'o-púch>, 岩手県九戸郡種市町の小子内（おこない）は<'o-ka-náy>で、<ká>の上である。また、秋田県鹿角郡小坂町の尾樽部や青森県の十和田町奥瀬の字樽部は<'ot-ru-pe>で<'ot>砂、<ru>は道、<pe>川である。

㊦斗内（とない）三戸、斗賀（とが）三戸、戸賀（とが）等の斗・戸は<tó>でないかといわれる。<tó>は湖・沼・池と訳されている。地

北海道と東北地方の地名関連について（藤島）

名用語として所・野老・野呂（ところ）は<tó-koro>であるという説⁽¹⁶⁾がある。遠野も<tó-nu>或は<tó-nup>でないかとも云われる。青森県の階上の道仏はく<tó-pèt>或は<tó-put>であるとは思われるが、所までは拡げることが出来るか否今の処不明である。各地にある当麻や道満が<tó-'oma-náy>も疑問がないわけでない。

青森県三戸郡の斗内，同名川町の斗賀，同階上の道仏，青森市の戸崎戸門，戸山，秋田県男鹿市大字戸賀，河辺郡雄和村の戸賀沢などがある。各れも<tó>と直接関連があったものと地形から判断できる。

<tó>の付く地名は北海道に多く，主なものに東梅，十弗，涛沸，統太，東別，鑑別，洞爺，遠矢，塘路，床丹，床潭や奔渡などがよく知られている。沼・湖のことではないが<tómam>がある低湿地のことで，苫米地が<tómam-pèt>で，馬淵が同じように<tómam-pèt>であったろうと想定される。

④丹内，谷内，反内（たんない）の地名も東北各地に多い。これは<tánne-náy>であろうと考えられる。同様に八戸の種差も<tánne-esashi>である。ただ，盛岡市の餌差，餌差小路，餌差小路裏などの地名は<'esashi>と全く関係がなく，鷹の餌の小鳥を捕える者の住んだ街の名である⁽¹⁶⁾。西津軽郡の鱈ヶ沢町の種里（たねさと）は<tánne-sát>である。

⑤これらの他に Ainu 語と思われるものを掲げると，保呂内，保呂毛，装綿，装帯，母衣内，母衣部，幌内<póro>がである。母衣はもともと鎧の背に負いて防ぐ布製の用具であったのが，Ainu 語の<póro>の上に覆せられたとみる。装は母衣の合成文字である。鳴子の保呂内は勿論<póro⁽¹⁷⁾-náy>と考えてよい。紅内（くれない）は<húre⁽¹⁸⁾-náy>，惣内は<shó⁽¹⁹⁾-náy>，白糠は<sirar⁽²⁰⁾-ka>，下北の尻屋は<shír-⁽²¹⁾ya>，尻旁は<shir-tukari⁽²²⁾>，品井沼や志内田は<shi-náy>，剣吉は<kène⁽²³⁾-'ush>，山内，三内は<sán⁽²⁴⁾-náy>，梅内は<mèm⁽²⁵⁾-náy>

浦子内，浦志内は<'ura-i-'ush-náy⁽²⁶⁾>詰って<'urashi-náy>，鎌内沢が<káma⁽²⁷⁾-náy>，半俵山（はったらやま）が<háttara⁽²⁸⁾>，尿前（しとまえ）が<shut⁽²⁹⁾-'ómay>，仁別が<ní⁽³⁰⁾-pèt>，原別が<pára⁽³¹⁾-pet>，本内が<pón-náy>，平内が<píra-náy>等と分析出来る。

3

以上の様に Aínu 語に語源があるとおぼしき地名は他にも数多くあるとみられるが，今日に至っては分析解釈の不可能なものが少くない。ただ，既に指適したように西南和語との関連から，いくつかの疑わしき地名を分析し同時に現地地形を考慮して，それら地名の語源を究明してみたいものとする。

a) tápkop <hill>

<tápkop> は（低い丸い山）を一般に指している。即ち，<pón-nupúri>或は，<póntu>のことである。千島 Aínu 語では<tap'kop>といい（一つだけ離れている山）をいう。北海道北部の方言では<ták-kup>と謂う表現もある。各れも<tápkop>の変訛である。一般に<丸山>と訳しているが，場合によっては<孤山>とも<小山><小丘><小円丘>とも訳すことが出来る。地形に適応させて其れ其れの訳語が用いられている。

北海道内の地名としては，夕張，瀬棚，檜山，静内，三石，白糠，釧路，野付などの各地域に分布している。沙流には<tápkop-pèna-kus-náy>がある。<pèna>は<pèt-pèna>として用いられ（川上へ）と訳すが，ここでは<tápkop の上を>とすべきであろう。<kus>は<kús-ke>など同一義語で（向い側）という意味もあるが，ここでの<kús>は<sírákkari>と同一義語で<通り抜ける>と考えてよいであろう。かつ<sírákkari>は樺太 Aínu が<sírahkari>といい，<通り過ぎる>と訳し，<kús>の方は<目の前を>或は<すぐ前を>の意味と区別して

北海道と東北地方の地名関連について (藤島)

いるので、沙流の<tápkop-pèna-kus-náy>とは、(丘を通過して水源へ行く川)の意義である。<náy>は沢で濁れ川にも用いられるが、是の<náy>は当然流れ川と考えてよいであろう。新冠の<tápkop-sara>は本来<to appear>なのだが、地名用語では<sár>で<kinup><kisar>と同様に(葦原)<sár>の変訛とみることが出来る。従って、(葦におおわれた丘)意義となる。浦河にも同様な<tápkop-sára>がある。羽幌には<tópkop-ush-náy>がある。<ush>は<……の場所>で、ここでは、(小山のある沢)となる。天塩には<'o-tápkop-'ush-pèt>がある。<'o>は川尻だから、(川口に丘がある川)となる。斜里の知床に<tápkop>があるが、これは単なる<小山>でなく、硫黄山山麓の溶岩岬を指しているものと思われ海岸地名である。斜里の<tapkop>は兎も角、地名としての<tápkop>は他の語と結びついて複雑な地形を表現しているものが多い。しかし、実際に東北地方に分布する<tápkop>は、唯一語で孤立している。かつては複雑な地形を表わしたものも今では推定するより方法がないのが現況である。

北海道の<tápkop>と類似した田子、達子、達古などの地名が東北地方各県に散在する。金田一京助は田ツ子とは一つの森、離れた森で、盛岡市近郊の田ツ子がこれに当ると説明している。鏡味完二⁽³²⁾は<tak-ko>とは小山と関係があって高所の意味だと謂う。これは(峠)殊に渡り鳥の渡る道をタオ、タワ、タゴと謂うことから推量したものと思われる。タゴはタオの変訛と考える。西日本地域にもタツコがあるが近畿以東に多いのは<tápkop>の原型が西日本地域にあって北上し関東、東北の各地域に残滓したものであろう。類似の語音を探がしてみるとタゴを穴のことを指す地方がある。肥タゴとは肥溜である。タツコ或はトツコといえば東北地方で切株のことであり、畚のことを長崎地方ではトツコと称している。関東北部栃木、群馬の一部では蟻地獄のことをトツコとっている。これらの各語が<tápkop>と直接関係が有るか否かは不詳

であるが、各れにしても東方地方へ北侵し混濁したものとすれば何等かの関連があったとみてよいであろう。仮に<tápkop>は全くな Ainu 語だとしても和語のトツコ等と関連しあって同義語的な解釈が生れたのではないかと考えられるのである。

岩手県葛巻町の田ツ子、久慈市宇部町の田子沢、同大川町の田子内、青森県三戸郡の田ツ子町、岩手県西磐井郡平泉の達谷窟、一関市の達古袋、この他田子淵、田子倉が福島県達子林が山形県に、達子、女達子、達子野、向達子が秋田県にある。秋田県の雄勝郡東成瀬の田子内は、成瀬川の氾濫原にあって、成瀬川は現在滝ノ沢へ流路をとっているが、かつては下田へ流路が有ったとすれば、傍の薬師岳が<tápkop>と呼称されて然るべきである。付近には平良や狙半内などの Ainu 語と関連をもつと思われる地名が多いことも<tápkop>説を確証づけるものである。亦、田子町では、この小丘よりに田子城があったとしている事も有力な手掛りである。

古語の他動詞(たつ)は裁つ、断つで切り放す、切り分ける意味やさまざまに隔てるという意味をもっているし、(こぶ)は瘤、癭で樹や物などの表面がうづたかく、かたまつたものを指している。<こぶ>の語源は拳やコフで木節、コは小さい、フはフクルルから来ているといわれている。青森、秋田、岩手ではコボ、コンボ、コンボコと訛ると謂われている。(たつ)(こぶ)の2語が<tápkop>だとは断定出来ないが、少くとも東北方言の中で同義語として用いられていたものとみてよいであろう。

b) *tóko-'oma-i*

青森県の木造の南の森田村に床舞(とこまい)があり、秋田県の西馬音内にも床舞(とこまい)がある。森田村の床舞について平山久夫は⁽³³⁾「床舞の淵源は秋田南部の床舞から鎌倉以前に移住したもので、蝦夷とは祖を異にする。」とある。一方、秋田の床舞については柿崎隆興が其

北海道と東北地方の地名関連について（藤島）

の郷土の地名⁽³⁴⁾で、「大正年間、塔古前、答合前の文字を当てていた。」従って雄勝城の城と直接関係があつて、塔即ち堂子前からきてトコマイと訛ったものではないかと謂うが、茂木久栄の謂う夷語のトコ・オマイの転訛とみてよいであろう。無論、語源が <tóko-'oma-i> であっても雄勝城と関係ないということではない。床舞の語源が <toko-'oma-i> で後に堂子前として用いられたとしても不思議はない。<tóko>は山端山鼻で、<'oma-i>は在る処で（山鼻の在る処）つまり（山の突端が出ばっている処）であろうと解釈するのが一般である。地形からみても適合している。

和語の地名で用いられる（とこなめ）の（とこ）は川底の岩の平たいところに水が流れていることを指している。常滑の常や滑川などが其れであろうといわれている。万葉にある「吉野の川の常滑の、絶ゆることなく」で川底の石についている苔を指しているとも謂われる。ともかく所謂「床」から派生したものとみてよい。別説にはトコは岩で、ナメは並の意とも解されていて長野県の小県郡のトコナメは、この岩の説を採っている。しかし、実際にはナメを如何に解釈したらよいかで、問題になるが、Ainu 語と比較すると意味深いものがありそうである。

亦、仮に <tóko> の原型が <tókororo> の <ro> の削除されたものとするると、床舞は <tókororo-'oma-i> となる。Ainu 語では母音が重なった時片方が消去されるので、<tókor-'oma-i> となって、床舞と発音されてもおかしくなくなる。和語地名でいう <tokoro> は（沼のある。沼を支配する）地名である。埼玉県在所沢市の所は（沼のある低地）であり、高知県の高岡郡越智町の野老山にある野老（ところ）や同大野見村の野老野（ところ）、或は野呂（ところ）と書く <tokoro> で、<tókororo-'oma-i> の Ainu 語と重なって来る。ただ、Ainu 語でいう <tóko> は山の端で、<tokoro> は沼のある異義語である。が、Ainu 語の <tóko> を <tó-kor-'oma-i> とすると（沼が傍にあるところ）となって決して

北海道と東北地方の地名関連について（藤島）

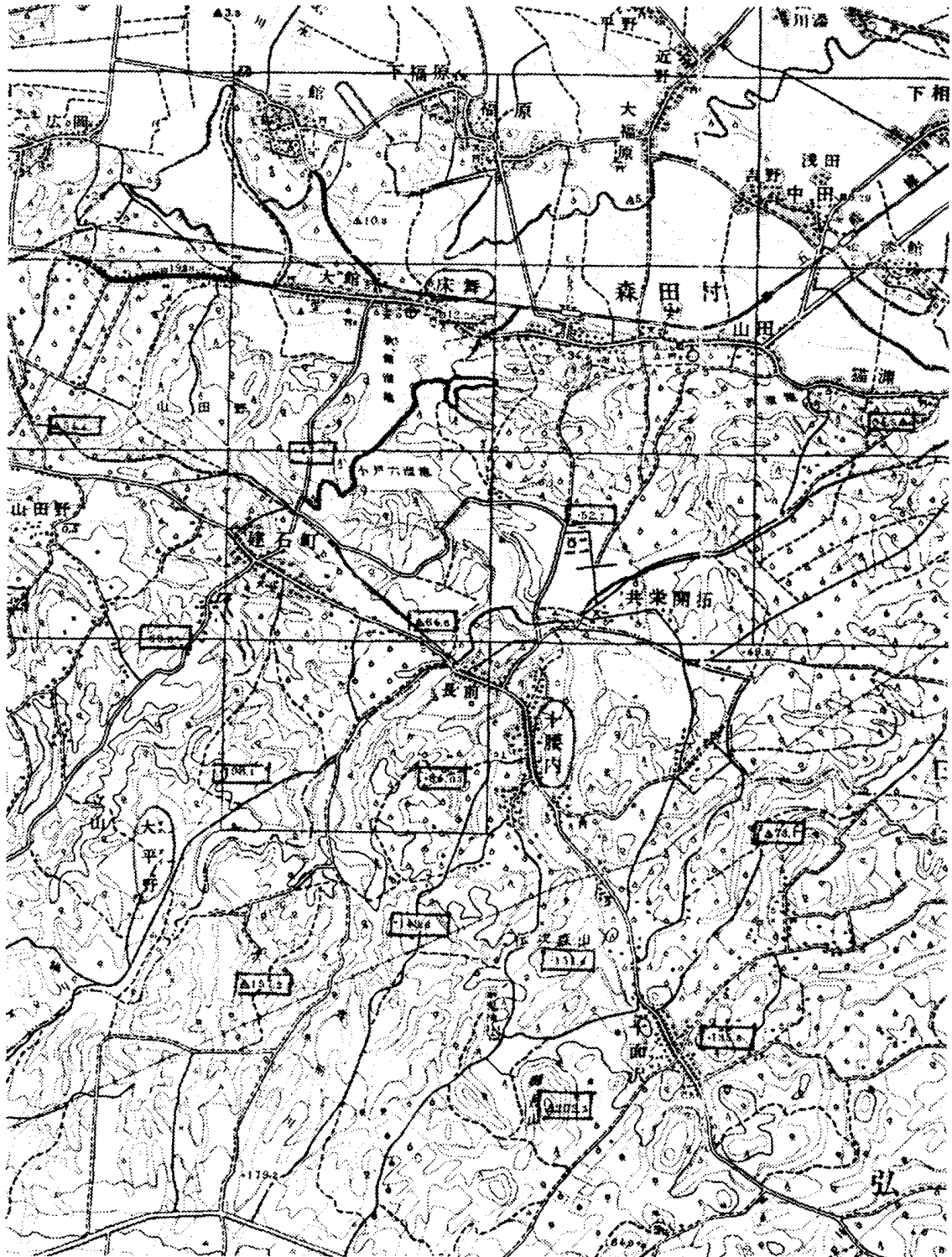
解釈出来ない語ではない。つまり、<tó>は沼或は湖として考えることが出来る。青森県の床舞は狄ヶ館溜池の傍にあるだけに<tó-kor-'oma-i>でも地名としては成立する。しかし、北海道は<tó-kótan 釧路><tó-kótan 厚岸>があっても<tó-kor-'oma-i>がない、逆に初山別には<tóko-'oma-náy>があって、瘤山としているのを見ると、床舞も瘤山と考えてよいのではないか。<tóko>が瘤である。<'oma>は在る処、<i>其処に、である。<'oma>の使い方は種々あるが、<minakur-'oma>といえは微笑する、<pír-'oma>といえは傷つく、<hupí-'oma>といえは腫れものができる。<súy-'oma>といえは穴があいていることである。<'oma>のみで入っていると用いられることもある。

床舞の付近の地形図を見ると南に十腰内がある。これは無論<tóko-'o-us-náy>で<tóko-shi-náy>となったものである。<tóko-'o-'us-náy>とは、ごちゃごちゃ瘤のついている所の川の義である。樺太真岡の広地に<tóko-'oma-náy>で瘤のある沢というのがあるが、これにもごちゃごちゃ在るのが在るの義が含まれている。例えば<tóma-'oma-náy>はエゾエンゴサクの塊茎のある処なのだが、エゾエンゴサクが只一本ある事ではない。従って、十腰内の<tóko-shi-náy>と<tóko-'oma-i>は瘤がごちゃごちゃ在るで共通することになる。

ごちゃごちゃの瘤山とは地形図に囲んである通り20ヶ所程の高地小丘が床舞の南部に集中している。これら残丘に名称のあるものもあるが、大方は無名丘である。これらの地形を指したもののなのである。

「斉藤助作並下沢氏抄録」に拠ると「木造新田大館村領夷館ト申ス処へ開懇ニツキ床舞村領小戸六ト申ス溜池御手入被成」とあるから、現狄ヶ館との関連を表わし Ainu 語系民族の集落があったことが推定できる。なお、床舞の北にある吉野は中郡裾野村十腰内巖鬼山神社の氏子が移住して来たものと伝えられている。西津軽郡史に拠ると床舞は天正年間鳴海集の開拓になるものとあって、貞享4年床越と改め、三原、小幡

北海道と東北地方の地名関連について（藤島）



を明治9年床舞に併合したことがある。これら最近の集落動向から現床舞が地名の <tóko-'oma-i> であったかどうか不明であるが、少なくとも現床舞低地以前に十腰内周辺が Ainu 語系民族の生活舞台であったもの

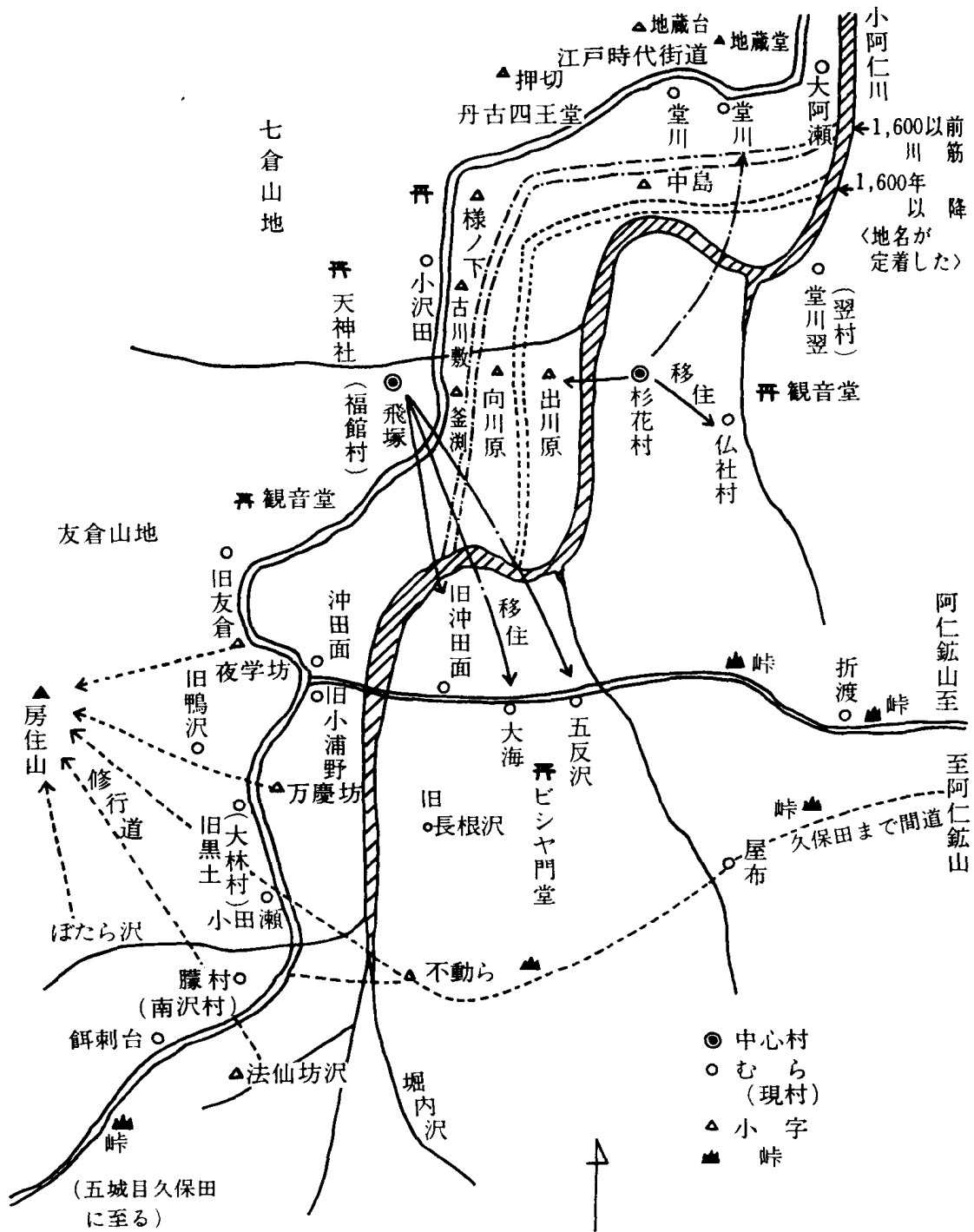
北海道と東北地方の地名関連について（藤島）

とみることあ出来る。或は十腰内も含めて、残丘の在る是の地域の総称が床舞であったかも知れない。従って現床舞より南部に命名された地名とみてよい。和語の（とこ）岩と何等から関連が見出されるかも知れないと思うのである。

c) 'Ane

秋田県の中中部地方に阿仁の地名がある。阿仁鉦山，阿仁川，大阿仁川，大阿仁，小阿仁，阿仁合などと称している。明治22年町村制あ布かれた時小阿仁地方は2村が置かれ，上流地を上小阿仁として下流地方を下小阿仁と称しているのので，上及下は後の地名で問題は阿仁となる。秋田実秀の口述と伝えられる「檜山湊合戦覚」に大阿仁，小阿仁の地名がある。元和期に蒐集されたと思われる「房住山昔物語」並に「房住山興玄記」に拠る⁽³⁵⁾と，坂上田村麿東征の頃，沖田面に高倉長者なる分限者がいた。後嗣者あいなかったのので姫君に養子をむかえたが，其の後男子が出生した。村人は養子の方を大兄と呼び，御曹子を小兄にと呼んでいた。長ずるに及んで高倉長者は家督を二分に大兄に米ヶ沢，小兄には鎌ヶ沢（釜ヶ沢）を与えた。以来，村人は米ヶ沢の地を大阿仁，鎌ヶ沢の地を小阿仁と称したと伝えられる。亦，別な伝承によると，往時この地に老大木あって山の神としてあがめていた。拝む度に注連繩をはったので，注連繩は古くなって翁の面のようになって翁面（今日の沖田面）となったとある。元和元年佐竹藩郷村帳に拠ると佐竹氏あ入国後間もなく阿仁鉦山の開発に手をつけ佐竹藩の財源として重要であった。この阿仁鉦山への主要通路は米代川水系であったが，久保田城の藩士からとっては迂遠路であったから，山越して沖田面を通り宿駅を設けたとあって，阿仁の地名は出て来ない。従って，これら最近の資料からいって阿仁と呼称されたのは阿仁鉦山の周辺ではないかと考えられる。沖田面即ち小阿仁地域の略図をみても Aínu 語的な地名が少い。あるとすれば小阿仁川くらいのものである。これらのことを総括すると小阿仁には阿仁

北海道と東北地方の地名関連について (藤島)



の地名がなく阿仁鉱山周辺の地名の起源であったものとみなすことが出来る。

爾来、阿仁の解釈には幾説か考えられていた。ジョン・バチエラーは <an-i>⁽³⁶⁾ で居る処と謂い、山中囊太は居住する谷ではないかと謂って

北海道と東北地方の地名関連について (藤島)

いる。Ainu 語で <'an-ni> といえば立木か幹のことで、この変訛とも考えられる。殊に阿仁の右名が楡澁 (すぎぶち) といったから杉の多い地帯を称した Ainu 語 <'an-ni> だとするのである。しかし、楡澁も Ainu 語の <shir-pèt> で山に沿って下る川の義とすると杉とは何等関係がない。かつて、<shir> は swift, very, well, much などの意だろうといわれたこともあるが、北海道の後志はもとの尻別川からきたもので <shir-pèt> であるといわれている地名と同様であろうと思われる。この他 Ainu 語では <'ani> の付く事がいくつかある。<kúani> とは私、<'e'ani> といえばおまえ、おまえたちは <'e'ani-'utár>, 手で抱くことを <'ani>, 持つことを <'ani>, 全然 <'ani, (not)···at all ~<'ani èpita> 彼や彼女を <'ani> であるが各れも地名用語としては類例がない。

それよりも、岩手県水沢市と同二戸郡にある姉体、姉帯の姉、青森県三沢市の姉沼と似ている。姉体は <'Ani-táy> で小さな森であり、姉沼の姉は細いである。

古語でいう (アニ) の語源は少くみても 10 種以上ある。その内の松岡静雄に拠る⁽³⁷⁾ と (アネ) から分派したものであろうとしている説もある。(アネ) の (ア) は (吾) で接頭語 (ネ) は尊称であるとしている。亦、関秘録に拠ると男女の区別としてニとネが用いられたとある。この意味からいうと「房住山昔物語」の兄という表現が肯定できる。更に、ニとネの転音が容易であることも推定できる。とすると逆に Ainu 語の <'Ane> が <'Ani> に変訛してもおかしくない。東北には古くから猿のことを山あになどと呼称して、あにに親しんでいたこともあって <阿仁> に転訛したものとみる。ただ、小阿仁の小が、大小の阿仁なのか Ainu 語の影響があるのか不明である。Ainu 語の <kó> は粉であるとか、<-ko> になってゆくなどとか地名用語としては成立しない。同様に大阿仁の大が Ainu 語の <'o> だとすると川尻である。<'o-'ane> は川尻の細い川となる。<'o> は亦、乗る、漕ぐ、入る、咲く等の動詞

北海道と東北地方の地名関連について（藤島）

にも用いられている。若し<'oó>, <'oho>, <'ooho>だとすると深い川となる。しかし<'oho-'ane>の地名は他にないのでこれも採らない。大阿仁, 小阿仁の大小はその儘和語の大小と考えてよいであろう。阿仁合の合は古語の合うなのか, Aínu 語の<'ay>なのか不明である。各れの場合も地名としては成立する。阿仁を<'Ane>として, 細い川の合流点, <'Aní-ay>として矢の様に早く流れる細い川とも考えられる。亦, いら草のことも<'ai>というので, いら草のある細川とも考えられる。この<'ai>は藍の和語と関連しているものと考えられている。ともかく阿仁の方は<'áne>の変訛で, <'ane-pèt>の略形とみてよいであろう。

北海道にある<'ane>は, 新冠町の姉去(あねさる), 永田方正⁽³⁸⁾は<'ane-sara>で, 細茅といい, 松浦武四郎⁽³⁹⁾は<'ane-i-saru>で細い茅原とっているが<'áne>の解釈は共通している。荻伏の元浦川に姉茶(あねちゃ)があって<'ane-cha> 細い枝とされている。ただ, 地名としては<'ane-cha-ush>なのであろう。厚岸の浜中に姉別がある<'ane-pèt>で細川のことである。浜中の是の周辺は湿地帯であるから泥炭の川が流れ合っていたものと思われる。この他に<'áne-'etu>細岬(岩内) <'áne-karinpa-ush>小桜(磯谷), <'áne-wátara>細岩(釧路), <'áne-ichan> 細魚の卵を罌く堀(釧路), <'áne-pèt> 細川(根室), <'áne-núpri>細き山(枝幸), <'áne-pke>細き岬(常呂), <'áne-p-náy>細川(常呂)などからみても<'áne>が地名用語として充分拡まっているものとみてよい。従って<'áni>も<'áne>の変訛で, 和語の兄の音韻が混入して<'ani>になったものとみる。<'ane>が阿仁の語源であるとみる。

d) táy

東北地方の方言では(タイ)とは平地, 野原の意味である。Aínu 語の<táy>は森林である。関東地方殊に茨城では(ダイ)が高地或は台地である。近畿地方の(ダイ)は山頂である。佐賀県でいう(タイ)は低

北海道と東北地方の地名関連について（藤島）

湿地のことである。つまり日本列島全域に涉って（タイ）或は（ダイ）が地名用語として用いられていることになる。新疆維吾兒自治区の kashgar で山のこと或は台地のことを <tay> と称している。Tarbagatay, Ulyas-tay, Budun-tay, Shabak-tay, Chichitaizu（茂茂台子）, Chitay（奇台）, Santay（三台）, Toutay（頭台）など多くの <tay> がある。公用語の THAI 語で <ta:i> は森林で、Ceylon でも <ta;i> は森林、India のボン語でも <ta;i> が森林である。金田一京助は日本語のタイは高地の上の平らな地形を指していて、Ainu 語の <táy> は <kène-ní-táy> 榛林、<komu-ní-táy> 樺林など木や草の叢生を指しているとしている。しかし、低地の森林ならともかく、高地にある森林であれば、和語のタイとは区別が出来ない。まして、周辺の国々まで同音と同義語であるから一層 Ainu 語と和語の区別が出来ないでいる。<ní-táy> の <ni> は木である。時によっては寄木にも用いられる。

更に、<táy> は漢字の仮借で、平・岱・台・体・帯を当てるので複雑になっている。東北地方に段渚する <táy> の地名をみると、青森県に原ヶ平、松木平（弘前）田代平（青森）、梨木平、佐比代、大杉平、梨木平一田白、大杉平一糠塚（八戸）、中平井（五所川原）、牡丹平（黒石）、向平（百石）、豊栄平、明神平（横浜）、洗平（六戸）、中野岱、向岱（下田）、五林平（板柳）、五代（岩木）、居森平、川原平（西目屋）、長平（鱒ヶ沢）、大川平（今別）、大平（蟹田）、李平（尾上）等に、秋田県には萩、台、銭ヶ台、小銭ヶ台、母体、李木岱（能代）、狐台、東台、山神台、山王台、萩ノ台（大館）、上舞台、下舞台、栩木台（湯沢）、上野台（横手）、岱、中岱（小坂）、山王台、椿台（八森）、釜ヶ台（仁賀保）がある。岩手県では下台、東下台、西上台、上台、東上台、台太郎、西下台（盛岡）、五代、台、東五代、五代（一関）、姉体（水沢）、安居台（遠野）、姉帯（安代）がある。北海道にも <táy> の付く地名が少くないが、道南の蕨岱は <wlunp-táy> でなく <wlún-

北海道と東北地方の地名関連について（藤島）

húll> であるといわれている。<húll> は丘である。<húll> を何故 <táy> にしたか不明であるが、岱そのものに丘の義がある事から用いたのであろう。青森には朝比奈平，狸平，石蔵平，明神平，小倉平，石川台，秋田には大岱，湯ノ岱，大久保岱，嘉兵衛岱，大野岱，李岱，山の神岱，餌刺岱など地域名或は俗称として残っているものがある。山形県には栃ノ台，沼ノ台，最上台，山梨県には大岱，身延町岱，市川大門町岱などがある。これらを見ると小高くて森林のあるところが <táy> とすると Aínu 語も含めて全て包合されるとみてよいであろう。<táy> が小高いという発想は，和語の（たいら）の語幹が（たい）であるからである。（ら）は接尾語で，奈良の<ら>と同じように，ひらたくすることを，たいらと謂うから，もともとの地形は小高くなければならないと考えている。これは（ひら）が（ひらたい）と同様な変化をしたものとみる事が出来る⁽⁴⁰⁾。

ただ，秋田の飯沢のようにに院ヶ台（いんがだい）の台は那智観世音の御堂を建立し（那智山・宗洞寺）てから台を付けたものも有るので，必ずしも Aínu 語説で片付けられぬ場合もある。飯沢の地はかつて「七くら八だい」と呼称され，土倉，滝倉，真田倉，小倉，岩台，控ヶ台（うどがだい），栩ヶ台（とちがだい），上台（うわだい）の地名があるのをみても複雑な地形であったものとみる。倉は Aínu 語で崖・絶壁或山に解している。かつ <táy> が森林とすると，この地方の景観が想像つく。以上の様に和語が源流であるのか Aínu 語に語源があるのか不明なものは，西南和語と Aínu 語が混濁した東北方言の大きな特徴といえそうである。

4

これらの他の和語と Aínu 語と交錯し混濁した疑いのものも幾つかある。例えば「野」のつく地名は Aínu 語の <nú> と関係がなかったか。

北海道と東北地方の地名関連について（藤島）

或は花輪の〈pánawa〉, 戸河内の〈pè-wákka-náy〉, 相川の〈áy-pèt〉
畑, 沢の〈háttara-náy〉, 日形の〈pí-káta〉, 折壁の〈'oro-ka-pèt〉,
湯尻や湯本の〈yú〉など, 実際地形と比較しながら今後とも解明に努力
し東国方言の位置と Ainu 語系民族の動向を考える資料にしたいものと
考えている。

参 考 文 献

- (1) 拙稿；〈秋田の地名研究—危険なアイヌ語説—秋田魁新報〉
- (2) 拙稿；〈北海道と東北地方の地名関連について—地形地名「ひら」に関する研究, 北海道駒沢大学研究紀要第8号別刷〉
- (3) 拙稿；〈北海道の地名分類1, 和名について, 北海道地理学会誌〉
- (4) 拙稿；〈北海道の地名分類2, 駒沢大学北海道紀要6〉
- (5) 拙稿；〈北海道の地名分類3, 河川周辺地名, 駒沢地理7〉
- (6) 拙稿；〈北海道の地名分類4—1, 海岸周辺地名, 北海道駒大紀要7〉
- (7) 拙稿；〈北海道の地名分類4—2, 海岸周辺地名, 駒沢地理9〉
- (8) 拙稿；〈北海道の地名分類5, 海岸周辺地名, 北海道地理48〉
- (9) 拙稿；〈北海道の地名分類6, 海岸周辺地名, 北海道駒大紀要7〉
- (10) 拙稿；〈増毛町史のアイヌ語地名について, 増毛町史〉
- (11) 山田秀三；〈東北と北海道のアイヌ語地名考〉
- (12) 佐々木弘太郎；〈樺太アイヌ語地名小辞典, みやま書房〉
- (13) 山田秀三；上掲書
- (14) 金田一京助；〈北奥地名考〉
- (15) 三浦鉄郎；〈地名のはなし—秋田の地名, 三光堂書店〉
- (16) 山本直文；〈日本アイヌ地名考 1965〉
- (17) 〈pón〉の対蹠語で〈póro〉は大きいである。北海道では殆んど「幌」を用いている。
- (18) 〈húre〉は赤いで, 紅内は意識である。上流に鉱山があったり, 泥炭地の川に冠せられる地名である。
- (19) 〈sho〉 | 〈só〉は同音で, 各れも「滝」を指している。
- (20) 〈káma〉〈sirar〉については, 拙稿；北海道の海岸地名；北海道地理学会報告にある〈sirar〉は海岸の岩である。
- (21) 〈shir-ya〉の〈shir〉は山の端, 〈ya〉は陸である。
- (22) 〈tukari〉は向う側である。

北海道と東北地方の地名関連について（藤島）

- (23) <kéne-'ush>の<kene>は榛の木，北海道ではハノキと称して，生育早く水辺に成長する。<'ush>は，のあるところである。
- (24) <sán>は下の，或は下る。或は降りる。
- (25) <mém>は泉，沼であるが，どうも飲料にできる水のようなものである。
- (26) <'ura>ヤナ，<i>はある，<ush>のあるところである。
- (27) <káma>平らたい石或は岩，釜の字を当てることが多い。
- (28) <háttara>は川の湊である。
- (29) <shut>山の裾，崖の裾をいうことが多い。
- (30) <ni>は木，寄木などをいう。
- (31) <pára>は広いである。
- (32) 鏡味完二；<日本の地名>
- (33) 平山久夫；<石神遺跡，西津軽森田村教育委員会>
- (34) 柿崎隆興；<郷土の地名>
- (35) 同町，田中覚治郎の解釈による
- (36) Batchelor；<An Ainu-English-Japanese Dictionary 1889>
- (37) 松岡静雄；<日本古語大辞典>
- (38) 永田芳正；<蝦夷語地名解>
- (39) 松浦武四郎；<山川取調図>
- (40) 拙稿；前掲<ひらの研究>参考